

| | |
|------------------|--|
| Title | アリウス復帰運動の史的考察 |
| Sub Title | On the rehabilitation of Arius |
| Author | 近山, 金次(Chikayama, Kinji) |
| Publisher | 三田史学会 |
| Publication year | 1964 |
| Jtitle | 史学 (The historical science). Vol.37, No.2 (1964. 8) ,p.1(117)- 24(140) |
| JaLC DOI | |
| Abstract | Generally recognized is the fact that the attack against the Creed of Nicaea was not direct nor frank. It had been the strenuous work of Eusebius of Nicomedia. Emperor Constantin the Great seems to have been responsible for its vicissitudes. In fact, he summoned the first oecumenical council, but he failed too in his work, having ordered to rehabilitate Arius into the church. After all, he had been a Roman Emperor, quite regardless of any theological controversy and seemingly an arrogant Pontifex Maximus all his life. Eusebius of Nicomedia and his followers began to make a long detour in which they pursued two things in a parallel way, to upset the leaders of the Nicaean Creed by rehabilitating Arius thoroughly with his partisans, and to break to pieces the Alexandrian reputation in banishing its bishop, Athanasius. (1) The Eusebians (so called Eusebius' followers) tried to accuse Alexandrian bishop, that he was elected too young and the electors were somewhat coerced by the people. But their attempt was fruitless (Epist. heort., chronicon, P. G. XXVI, col. 1352; Socrates, H. E. I, 23). (2) They demanded Arexandrian bishop to receive Arius into the church, but the bishop answered that he could not accept the heresiarch excommunicated in the Oecumenical council. The imperial enjoiment in this case was frustrated too (Athanasius, Apologia contra arianos, LIX-LX). (3) At the end of 331, the Alexandrian bishop was summoned to Nicomedia on account of the Meletian conspiracy and retained there for a while in a sort of captivity but he succeeded at length in vindicating himself (op. cit., LXI-LXII). (4) The Meletian tumult at Alexandria induced its bishop to attend the Tyrian council, Jul.-Sept. 335. Dissatisfied with the coucil, Athanasius went to Constantinople to meet the Great Emperor. In his absence, the Tyrian council proclaimed his banishment and deposition. On the other hand, the bishop was exiled to the west by the Great Emperor. So the Alexandrian reputation was diminished. (5) Arius was already admitted in the Empire but the Alexandrian church refused decisively to receive him and even showed their rough hostility. Then he was summoned to Constantinople by the Great Emperor who questioned Arius again about his faith. Suddenly, Arius met his death in the street (Athanasius, Ep. ad Episcopos Aegypti et Libyae; De morte Aarii). (6) In 337 (May 22), the Great Emperor died at Nicomedia, having received his baptism in the hand of Eusebius. Nothing authorizes to say that the Great Emperor abandonned the Nicaean Creed. Nevertheless it is a clear fact that he could not understand the importance of this creed. We should not say without reserve that the Christian Ages began with Constantin the Great. |
| Notes | |
| Genre | Journal Article |
| URL | https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19640800-0001 |

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

アリウス復帰運動の史的考察

近 山 金 次

異端者アリウスの復帰運動とはアリウスの主張をそのままにして彼を教会の中にもどそうと言う乱暴な試みであるがそれはニケア信仰の表明を法令の線で守ろうとするコンスタンチヌス大帝の態度をくぐつて、当時アタナシウスを中心に声望を高めつつあつたアレクサンドリア教会を牽制しようとした『エウセビウスの徒』(hoi met Eusebiou 或は hoi peri Eusebion) と呼ばれる仲間の策動であつた。三二五年ニケア会議でアリウスが三位一体的信仰を聖子従属説的に解釈し、殊に『聖父と一体たるもの』(homoousion to patri) と言う句に反感を示すことによつて異端を宣せられ、彼とその仲間が大帝によつて追放されたことは周知の事実である。それが三二八年頃から少しづつ帰国を許される様になり、アリウス自身も復帰工作によつて首都に戻り、この様なことから教会と国家の亀裂は收拾し難いものになつて行く。ニケア信仰の支持を生涯の政策としていたと言われる大帝の意図と一見、相反したかに見えるこの厳しい史実には如何なる解釈が加えられるべきものか、若干の検討を加えてみたい。

そもそも三一二年頃から明瞭に現れる大帝のキリスト教的なものへの接近が何を意味するかについては J. Burckhardt, Die Zeit Konstantins des Grossen. (1853) 以来、多くの史家が既にこれを論じ、また帝国領内に於ける異端弾圧と云う点でドナトゥス派に対する処置⁽¹⁾についても十分検討された。それによつて大帝がキリスト教の内容につい

て早くから決して無関心ではあり得なかつたこと、また大帝のもとにおける教会と国家の結びつきが極めて積極的なものを標榜していたことが証明された。たしかに大帝は刑罰や負債の法をゆるめ、奴隷や貧民の救済に意を用い、キリスト教聖職者に免税し、日曜休日制を採用し、各地に教多くの教会や社会施設を造つた。

そうだからと言つてこれでキリスト教時代が来たかの如き考え方もつのは歴史の見方を全くいかげんなものにしてしまう危険がある。ニケアで異端を宣せられたアリウスが十年を出ずして首都に姿を現す^(三)。アタナシウスは信仰の柱となつて苦斗せねばならない^(四)。帝国の保護下にある東方の教会より、その保護に欠けた西方の教会の方が本来の宗教的使命に即して行動出来るのは何と云う皮肉であろう。大帝がシルヴェステル教皇からラテラノで受洗したことにし、その時の大帝の寄進の作り話が五世紀から歴史をゆがめるのは何故であろう。大帝を最初のキリスト教的皇帝と見る歴史の常識は何か大帝の歴史像に対する批判をなまくらにしてしまつた。大きく譲歩して大帝の生涯をひどくキリスト教的なものに見做すことが出来ても、史実の告げる限り大帝は臨終の床までキリスト教徒ではなかつたのである。大帝は自分のことを聖使徒の仲間に入るべきものと思ひ込むことが出来るほど真の意味でキリスト教の本質から遠く離れた人であつた。この聖女ヘレナの子は生前から権威と伝説の雲につつまれていたが、死後二十年、一門のうちでたつた一人生き残つた自分の甥のユリアーヌスに初めて徹底的に誹謗された。ユリアーヌスは異常なまでにキリスト教徒の虚偽と無氣力を憎み且つ軽蔑した。彼をとり囲んでいた宮廷のキリスト教徒とはその様なものであつたのかもしれない。彼は自分を孤独にしたキリスト教徒を呪咀して死んで行つたが彼の死によつてコンスタンチヌスの血統は絶える。大帝があれほど希求した一門の繁栄は有名な背教者の死によつて終つた。大帝のすぐ後をついだコンスタンチウス二世の治世を見てもそれは姿を変えた教会迫害の時代であると云える。アタナシウスは追放されているし、殉教者ポタモンは答うたれ

て死んでいる。しかも大帝の子等は何事をするにも先ずそれが大帝の意図であつたことを強調するのが常であつた。然らば大帝の意図とは果して如何なるものなのであるか。彼が終生かかげた公会議の決定ですらも歴史的に十分検討して見なければなるまい。

先ず殆ど万場一致に近かつた公会議の決定に対して世論がわずか二、三年でゆるみを見せているのは何のためであるか。それには少くとも(一)大帝の宗教政策とまで言わなくとも彼の宗教に対する態度そのものに検討の余地がある。大帝がキリスト教に近づいた動機が如何なるものであつたにせよ、ミラノ勅令以後のキリスト教支持が如何に顕著であるにせよ、またその晩年の施政が如何に加速度でキリスト教化を見るにせよ、彼はその生涯を通じて最後の瞬間までキリスト教徒ではなかつたことを軽視してはならない。史家エウセビウス (Eusebius, *Vita Constantini IV*, 62) の伝うるところによれば大帝は臨終の近きを知つて受洗したもので、当時の厳しい教会の習慣に従えばその日常生活に於て教会の祭式に列する資格のなかつた人であり、当時の社会に生きるキリスト者としての生活を経験したことのない皇帝であつた。従つて我々は彼に対し簡単にキリスト教理念を結びつけて考えることは行きすぎで、聖女ヘレナの子としてのコンスタンチヌスとローマを支配する大帝の映像とを無造作に重ね合せたりしてはならない。事実、彼はミラノ勅令以後、信仰の一致に国家の統一を求めているが、その態度には如何にもローマ皇帝らしい直接的で且つ実利的なものがあつた。時に屢々安易で妥協的な平和に満足することをいとわぬ。信仰と言いながら平和を、平和と言いながら妥協を強制する絶対君主に豹変しない保証は何処にもなかつた。キリスト教にローマの将来をかけたと言われる彼は自ら *Pontifex maximus* である限り最高の宗教的権威者の資格を棄てるものではない。彼が教会の司教に対して自分を外界の司

教と称していたこと (Eusebius, *Vita Constantini*, IV, 24) は奇としないが、自分を聖使徒に等しきもの (isapotos—Eusebius, *op. cit.* IV, 60) と見立てていたことは当時の人々をも啞然たらしめるものがあつた。偉大な業績に反比例して知性も品性もそれほど高くはなかつたと思われる彼が信仰の玄義についての神学的論争を理解し得なかつたとしても不思議はないが、その無理解を何らかのはづみに傲慢な權威主義でつつみ隠し居丈高に実行力に訴えようとすれば無数の惨劇が生れる筈である。その辺りに警戒心に充ちた視点を置いて伝えられる実相と言うものをもう一度見直してみよう。

ニコメディアの司教エウセビウスとニケア司教テオグニス^(五)は三二八年に追放から帰つて司教座にもどつている (Philostorgius, H. E. II, 7; Socrates, H. E. I, 15; Sozomenes, H. E. II, 16)。彼等の追放をただ行政的処置と見て公会議の宗教的權威を問題にしなれば、この神学論争を最初から一種の騷擾罪と見ていた大帝が公会議後も問題の重要性を理解しない限り、三年間の追放を人間的同情によつて解いたとしても不思議はない。これが単なる騷擾罪であるか否かを暫く措くとしても、大帝にとつて容易な行政処置だけで問題が片づくかどうかは別問題であり、反つてこの様な行政処置が論者の立場を一層紛糾させてしまふかもしれない危機を大帝としては敢えて目を閉じていると言ふのが実情であることを正視しておかねばなるまい。こんなことからアリウスも前後して特赦を受けた様であるが、それが何時いかにしてであつたかは皆目分らない^(六)。アリウスがエウセビウスやテオグニスより前に追放から戻ろうと或はその後であらうと、何れにせよアリウスはアレクサンドリアにはもどれなかつたらしい。エウセビウスはもしアリウスの教会復帰が実現したら *homoousios* の仲間は大打撃を受けるだらうと考え、アタナシウスに手紙を書いてアリウスの教会復

帰を許可するように頼み、更にその手紙の持参者にはもしアタナシウスが拒めば敢えて脅すように言いふくめた様である (Athanasius, *Apologia contra arianos*, LIX; Socrates, H. E. I, 23; Sozomenes, H. E, II, 18)。これより前エウセビウスが配所から送った訴状^(七) (Socrates, H. E. I, 14; Sozomenes, H. E. II, 16; Gelasisus Cyzicus, H. E. III, 13)でもエウセビウスは騒擾罪と見る大帝の立場を巧妙にとらえて信仰の一致を強調すると共に、まともな裁判もなく追放となつた処置の不当を問題にしている。復帰運動はその目的実現のために神学論争から一步後退して穏当な処置を云々しているが、アタナシウスとの交渉にも同様な態度で臨んでいることが分る。勿論アタナシウスは公會議で破門された異端の張本人を教会に入れることは出来ないと答えている (Sozomenes, loc. cit.)。

三二七年秋ビティニアのヘレノポリス (Drepanum) でアンティオキアの司祭ルキアーンヌスは殉教者として聖別された。この聖人に対する人気の上昇でその弟子としてのアリウスやエウセビウスに対する大帝の評価も或は左右されたかもしれない^(八)。アリウスを破門したアレクサンデル司教が三二八年に死んだことも或は一つの機会になつたかもしれない。少くともメレチウス派は新しい後任の司教アタナシウスに対して烈しい分派活動を再燃させている。何れにせよアリウスの復帰運動について看過し得ぬことは大帝の義妹コンスタンチアの傍に熱心なアリウス派の司祭がいたことで、三三〇年彼女が臨終の床でこの司祭を大帝に推薦したことであり、伝によれば彼女は大帝が多勢の善良な人々をいじめたかどで神の怒りをおかっていると嚇したそうである (Rufinus, H. E. I, 11)。こうした暗示に弱い絶対君主として恐らく大帝はひどく驚きあわてアリウスとの謁見と審問が実現することになる^(九)。

アリウスは友人エウゾイウス (曾てアレクサンドリア教会の助祭であつたが、アリウス派の理由で廃位された人) と共に首都に急行し、大帝は彼等に向つてニケア公会議の決定を承認するかを尋ね、二人が承知の旨を即答すると大帝は

それを書面にせよと命じた。こうして二人は大帝を欺くために狡猾な *Symbolum* を書上げるわけであるが、史家ソクラテスはその主要な部分を次の如く伝えている (H. E. I, 25-26)。『われは全能の父なる唯一の天主を信じ、また聖子、われらの主イエズス・キリスト、即ちすべての世紀の前に父より成り給ひし御言葉 (*ex autou pro pantōn tōn aiōnōn gegenēmenon*)、天地の万物これによりて造られしもの、天より降りて肉となり給ひしもの (*sarkōthenta*) : : : もしわれ等がこれを信ぜず、カトリック教会全部の教えと忠実なるべき聖書に従わず、聖父と聖子と聖霊を心から認めないようなことがあれば、天主に裁かれるであろう』と。アリウスは *gegenēmenon* (生れ) とは敢えて言わず、*gegenēmenon* (成る) という語を用い、*homousios* の語は出さず、つまりアリアニズムを表現の中に組入れ、正統派の主張を無視する態度に出たのである。しかも神学を解せず⁽¹⁰⁾にこの様な問題に介入し、平和を名として教会人のなし得なかつた異端の征服をなし得る誇りに目のくらんだ大帝をろうらくするために『天主に裁かれるであろう』と言う様なため押しつけ加えてある。しかしこの場合アリウスが必しも良心に恥ずる行為をしていたと言う風に理解する必要はない。ただ彼が人一倍、政治的な感覚をもち、政治的に行動出来たことだけは確かである。大胆な推測が許されるとすればアリウスは神学的に *homousios* と言う様な表現を一般の信仰表明に組入れる必要がないと考えていたのかもしれない。それほど重大と思われない問題で信仰の自由をしばり、社会の平和をみだすに当るまいと考えていたのかも知れない。神学の問題をもしその様に考えているとしたら、それは彼の神学探究の才能の多寡が問題となるのではなくて、彼の政治的関心が宗教的熱情を上まわっていたことによるものである。聖書についても教理についても恐らくアリウスはロゴスについての自己流の見解をもつていたし、それを棄てようなどとは夢にも考えていなかった様である。ともかく大帝はアリウスが進んで三位一体的信仰表明をするのを見てニケア信仰に対する恭順が示されたものと見

做した。そう見做すことは大帝に少なからぬ自己満足を覚えさせたことであろう。信仰表明がすむとアリウスは大帝に教会復帰を願ひ出た。⁽¹¹¹⁾この際エウセビウスは大帝にとり入つてアリウスの復帰を拒絶しているものがアタナシウスの嫉妬であることを説いたかもしれない。ともかく大帝はアタナシウスに向つて命令を出し、すべて教会復帰をねがい出ているものを迎え入れるように威嚇している。アタナシウスはその書簡の末尾を我々に伝えている⁽¹¹²⁾ (Athanasius, Apol. LIX)。それはソズメネスの中にもある⁽¹¹³⁾ (Sozomenes, H. E. I, 22)。ところがアタナシウスは異端を教会の中に迎え入れることは出来ない旨を大帝に告げ、大帝もそのことを一応断念する。つまりアリウスが責任の明らかな場所で責任のある信仰表明をするのでなければこの様な政治的工作をいくら試みても無駄だと言うわけで、大帝もそのことについて盲目ではあり得なかつた。ともあれ大帝はアリウスの正統性を自分で決めようとは思わない。それでそれを会議にかへようと考えたのは当然である。かくて数年後、即ち三三五年、イエルサレムでアリウスに有利な裁決が見られることになる。⁽¹¹⁴⁾それまでの経過がアリウスの復帰工作と云うよりか、執拗なアタナシウスの覆滅運動であること、その主役がエウセビウスと大帝自身であることを銘記すべきである。今しばらくその経緯を辿つて見よう。

大帝のとりなしでアリウスを教会の中に復帰させようとする試みはアタナシウスがその毅然たる態度を変えないので失敗し、一頓挫したのを見てエウセビウスはその目的貫徹のためメレチウス派を利用しようとした。このメレチウス派はもともとニケア公会議では、はつきりとアリウス反対の立場を示していたものであり、その司教アケシウスもニケア信仰が使徒時代の信仰をつぐものと明言していた。ところが三二八年、アレクサンドリアの司教アレクサンデルがこの世を去るとメレチウス派は自分らのした約束を忘れてまた分裂の動きを見せている。メレチウス派の人々はメレチウスがニケア公会議後まもなく死んでからは後継者としてヨハネス・アルカブをアレクサンドリアで推戴していた。エウセ

ピウスはこの分裂運動の仲間が当面の敵としてアレクサンドリアの正統派の教会とそれを指導するアタナシウス司教をひどく憎んでいるのを知つて、このメレチウス派を味方にひき込んだのである (Athanasius, *Apologia*, LIX; Sozomenes, H. E. II, 21)。こうしてメレチウス派は全く政治的な理由からアリウス派に組する結果となり、完全にその仲間と化してしまつたのである。『エウセビウスはメレチウス派と組む理由を見つけ、書簡でアタナシウスへの非難を推進させた』とアタナシウス自ら記している (*Apologia*, LX)。その試みは迂余曲折を経て終にメレチウス派の司祭三名がニコメチアにのり込み、アタナシウスへの非難を大帝に直訴するまでになつた。非難の内容はアタナシウスが祭服 (*sticharia*) について無用な改革を行い、エジプト人に余計な負担をかけ、大帝の権限を冒したと言ふのである。アタナシウス派の司祭二名も既にニコメチアにあり、大帝に事の次第を告げて容易にその非難の誤りを知らせた。ところが大帝としてはアタナシウスが自分でニコメチアに来て釈明することを命じている。この経緯を知つたエウセビウスはメレチウス派にニコメチアからの出発を思いとどまらせ、アタナシウスがニコメチアにやつて来ると彼等はまた別の二つの事柄で司教を訴えることになつた。(一)は司祭マカリウスがメレチウス派のもつ聖杯を壊したと言ふこと、(二)はアタナシウスが謀叛者フィロメネスに黄金をつめた箱を贈つて援助したと言ふこと、である。アタナシウスはこれらの非難をうけて暫くニコメチアに監禁された様である。三三一年の復活祭の前に書かれたアタナシウスの三番目の司牧書簡から少くともそう言えると思う (Pat. Gr. XXVI, col. 1377; *Chronicon* col. 362)。アタナシウスはそれでもこれらの非難がともに理由なきものであることを大帝に思い知らせたらしい。その結果、鄭重に放免されたわけで、帰国にあたりアタナシウスはエジプト教会宛に三三二年の復活祭のための司牧書簡をまた記している。大帝は長い勅令をそれに付加して居り、その中で一致を希う大帝はメレチウス派に向つて厳しい言葉を重ねているが、アタナシウスに対しては *an-*

thrópos theou (神の人) と言う極めて名誉ある称号を贈つてゐるのである (Athanasius, Apologia, LXII; Socrates, H. E. I, 27; Sozomenes, H. E. II, 22; Theodoretus, H. E. I, 25)。アタナシウスは暫く小康を得た。ところが間もなくメレチウス派はまた献上品をたずさえてアタナシウスに対する新しい非難を大帝にもち込むのである。神学論争など何処かへ雲散霧消して、メレチウス派とアタナシウス派の対立が露骨になり、それに由来するエジプト教会の混乱が大帝の憂慮をかき立てる。

アレクサンドリアの司教座に所属するマレオチス地方にメレチウス派は一つの教会ももつていなかったのであるが、その地方でイスキラスと言う俗人が聖職者の資格を詐称し、聖務を行つていた。これを知つたアタナシウスは訪問巡視の折に司祭マカリウスを派してイスキラスに自分の行動を釈明するためアレクサンドリアに出頭することを命じた。マカリウスが同地へ赴くとイスキラスは病気で、父親に会えただけであつたが、マカリウスはその父親に息子がこの様な汚行をつづけないように忠告した。ところがイスキラスは病気がなおるとメレチウス派の許に走り、共謀して新しい嘘を作り出した。アタナシウスの命令でそれを調べることになつたマカリウスはイスキラスの祈禱所にのりこみ、祭壇をひつくりかえして聖杯を壊し、聖書を焼いた (Athanasius, Apologia, LXIII; Socrates, H. E. I, 27; Sozomenes, H. E. II, 23)。こうした事柄はすべてアタナシウスがニコメヂアへ行く前に起つたことで、前述の如くアタナシウスはニコメヂアでそのことを訴えられたわけであるが、そのとき大帝は何もとり合なかつた。と言うのもアタナシウスがイスキラスの認めた謝罪の書簡を大帝に見せることが出来たからで、この書簡でイスキラスは自分の詐りと誤りを認めなお自分を教会に入れてくれと懇願しているのである。⁽¹⁴⁾メレチウス派はこの問題をまた蒸し返しているわけであるが、更にもう一つ別の事件を捏造した。それによるとアタナシウスはヒプセレの司教アルセニウスを暗殺させ、その死体か

ら腕を切り取り、それで魔法を行つたと言うのである。この陰謀の作者はメレチウス派の司教ヨハネス・アルカプであり、そのためアルセニウスは多額の金銭を贈られて身を隠し、死んだと言う噂さを一般にひろめさせた。死者の腕は到る所で見せびらかされ、その訴えは大帝の耳にも入った。大帝が早速、事件の調査を命じているのは当然であろう (Athanasius, *Apologia*, LXV)。

初めアタナシウスがこんな馬鹿げた策謀を無視していたのは不思議でないが、それでも彼はアルセニウスを探し出さねばならないと思つて各地に手紙を書き、一人の助祭を地方に派している。この助祭は終にアルセニウスがエジプトのプテメンキルキスの修院に隠れていることをつきとめた。直ちにそこにのり込んだが、彼の着く前に修士等はアルセニウスを小舟にのせて更に遠くへつれ去つた。やむを得ず二名の修士(アルセニウスと逃亡中のヘリアス及び陰謀の一部始終を知る司祭ピネス)を捕えさせた。この二名はアタナシウスの面前に引き出されると、アルセニウスがまだ生きている事実を言明した (Athanasius, *Apologia*, LXV-LXVII; Socrates, H. E. I, 27)。本当とは思えないこの奇妙な訴えの目的は果して何であつたか。少くともエウセビウスの徒はやがて来るべき工作を隠蔽し、人々の関心をそらせるための行動を重ね、会議を開く準備に怠りなかつた。^(一五)こうしてエウセビウスの徒は三三四年カエサレアに召集すべき会議にアタナシウスを呼び出そうとした。招請状は出されたがアタナシウスは敵の策動を読みとつて出席しようとしな(Sozomenes, H. E. II, 25)。他方、彼は大帝に事の由を告げ、アルセニウスの発見を告げ、聖杯のことについては既に釈明済みであることを思い出させている。そこで大帝は事件を整理させ、エウセビウスの徒には居住地にもどらなければならぬことを覚えさせ (Athanasius, *Apologia*, LXV)、アタナシウスには深い敬意を示す親書を送つたのである (op. cit. LXX)。そうなるとアルカプ司教も慎重な態度で大帝をなだめる手紙を書き、アタナシウスとの和解を懇

望したので、少くとも大帝はその好ましい意向を喜んだと伝えられている (op. cit. LXX)。

エウセビウスの徒が静止したかに見えるのはほんの一年か一年半の間で、その間にも幾度か大帝に建議し、大帝が会議を召集して教会に平和を再建し、分裂を終らせる必要があることを強調してやまなかつた。治世三十年祭がその執念深い希望を繰返す口実を与えていた。大帝はイエルサレムに建立した新しい聖墓の教会の祝別に多くの司教と同席することを決意していた。『もしそれ以前に司教の間に一致が再現していたら、またもしエジプトの教会を苦しめている紛争が終結出来たら、その式典はどんなにか素晴らしいことであろう』とエウセビウスの徒は言っていたと言う。この裏切りの暗示は大帝が教義と規律の一致を再現しようとしていた熱望とあまりにもうまく合っていたから、圧倒的な勝利を占めないではすまなかつた。大帝は司教等に向つてチルに集合を命じ、そこで一切の紛争に結末をつけて聖墓の教会にのり込もうと決意した (Eusebius, *Vita Constantini*, IV, 54)。エウセビウスによると大帝は自らエジプト、リビア、アジア、ヨーロッパの司教を召集し、官吏のディオニシウスに審議を監督させ、会議の冒頭でまだ全部の司教が到着していない時に司教等に向いよく話し合つて紛争を終結させるように激励した、^(一六) と言うのである。アタナシウスは初め自分の問題を裁く者としてエウセビウスの徒を認めようとしなかつた。と言うのもエウセビウスの徒は異端で事実上の敵であると言う当然の理由に基くものであつたが (Athanasius, *Apologia*, LXXI)、大帝はそのアタナシウスを無理に会議に出席させている (op. cit. LXXII)。こうしてアタナシウスは三三五年七月十一日にアレクサンドリアを出帆した。前年アタナシウスについて讃辞をおしまなかつた大帝が突如その態度を変えて何故に厳しい態度に出たものか、それは問題である。この頃のアタナシウスが異端の弾圧にかなり積極的でその当然の結果として多くの敵をつくつたことが容易に推測される。中にはペルジウムの司教カリニクスの如くアタナシウスの叙階についても不正を唱え、陰謀を云々し

て廢位されたため、自分に対する処置の不当を訴えてやまない人もいた様である (Sozomenes, H. E. II. 25)。こうしてエジプトの教会が大混乱に落ちてしまつたかの様な噂さが流れて見れば、たださえ信じ易く動かされ易かつたと言われる大帝 (Eusebius, Vita Constantini, IV, 54) がその噂さの原因になつてゐる人物に激しい怒りを覚えたとしても不思議はあるまい (Sozomenes, H. E. II, 31)。エウセビウスの徒はアタナシウスの神学がサベリアニズムではないかと懸念し、穩健な人々も多くアタナシウスがニケア信仰にあまり積極的にかかわり合ひすぎると言つて非難し、少くもアタナシウスがアリウス派を教会の中に入れてはならないことに不寛容な態度しか認められなかつた。アリウス信仰の致命的な歪みについて理解しようもなかつた大帝が騷擾罪としての策動にひつかかつて為政者としての立場から高圧的にアタナシウスに臨むようになったのかもしれない。ともかく事態の重要性を意識したアタナシウスは四八名の司教と共に會議に向つた (Athanasius, Apologia, LXXIX)。

チルの會議では事態の成り行きからメレチウス派は告発者でアタナシウスは被告であり、エウセビウスの徒は裁判官と云う立場になつた。會議を主宰した史家エウセビウスは以前からエジプト司教殊にアタナシウスに反感を抱いていた人物である (Athanasius, Apologia, LXXXVIII)。メレチウス派の司教カリニクスとイスキラス^(一七)はアタナシウスに対する非難を繰返してゐた (Sozomenes, H. E. II, 25; Athanasius, Apologia, LXXIV)。事のついでにアルセニウスの問題も再燃したが、肝心のアルセニウスはチルで逮捕され、長官には否認を重ねてゐたが司教に見破られ、その情報は早速アタナシウスに伝達された (Socrates, H. E. I, 29)。アルセニウスはアタナシウスに手紙を書き、メレチウス派とはつきり分れることを約束してゐる (Athanasius, Apologia, LXXVII; Socrates, H. E. I, 29; Theodoretus, H. E. I, 28)。これらの経緯について全く無知なメレチウス派の人々は會議でまたアルセニウス殺害を云々し、有名な

腕を見せびらかした。アタナシウスは若干の人々にアルセニウスを認知出来るか問いただした後に、死んだ筈の本人を議場に入れ、外套の両端をかかげて両腕の存在を示したと言う (Theodoretus, H. E. I, 28; Socrates, H. E. I, 29; Sozomenes, H. E. II, 25)。その時の光景は史家によつて様々に伝えられている。陰謀の作者ヨハネス・アルカプが即座に逃亡したと云うもの (Socrates, H. E. I, 30)、アタナシウスがまた魔法をやつたと言つて憤慨したと言うもの (Theodoretus, H. E. I, 28)、⁽¹²⁾まことしやかな解釈が加えられたと言うもの (Sozomenes, H. E. II, 25)、さまざまである。何れにせよ何の歴史家もアルセニウスの出現が議場に驚くほどの騒ぎをまき起したと告げている。アタナシウスの敵は詐欺を恥じるどころか怒鳴り出して、アタナシウスの命も一時危うかつたと言う。⁽¹⁹⁾要するにエウセビウス派の目的は会議を徒に紛糾させて現地調査の必要を確認させ、アタナシウスの留守をついて自分等に有利な調査報告をまとめ、アタナシウスを騒擾罪で駆逐しさえすればアリウスの復帰工作は容易になると睨んだのであろう。こうして実地調査の委員会が編成され、エジプトに派遣された (Athanasius, Apologia, LXXII-LXXXIII)。大帝がチル会議の相つぐ騒擾に憤慨し、アタナシウス派の人々もこの会議が余りにも世俗的に兵士等の力などをかりて運営されていることに抗議していたことも銘記すべきである。少くともこの情勢にあきたらなかつたアタナシウスは単身コンスタンチノポリスに乗り込んで大帝に直訴を試みた。他方、エウセビウスの徒は会議脱落を名としてアタナシウスを破門し、調査報告に基くものとしてこれを廢位した (Sozomenes, H. E. II, 25; Athanasius, Apologia, LXXXV; Socrates, H. E. I, 32)。チルからイエルサレムに赴いた司教等はアリウス派の教会復帰を厳かに命じ (Athanasius, De synodis, XXII) その決定を各司教と聖職者殊にエジプト教会に向つて通知し、その寛容の実例が到る処で模倣せられるように取りはか

27)。ところでチル会議に出席した司教全部が直ちにコンスタンチノポリスに呼び出されることになった。それは次の様な事情に由来する。

アタナシウスは調査委員の出發直後、九月上旬にチルを出たものらしいが (Socrates, H. E. I, 34 ; Sozomenes, H. E. II, 28) 十月末、首都につくと (Epist. heort. Chron., PG. XXVI, col. 1353) 大帝の通路に待ちかまえて直訴を試みた。大帝は初めその会見を拒んだが、ただ新しい会議を大帝の面前で催して一切を明かにしたいと希うアタナシウスの熱心な希望にはだされ、チルの会議に出席した全司教が首都に来ることを命じた様である (Athanasius, Apologia, LXXXVI ; Sozomenes, H. E. II, 28)。首都に上つて来たエウセビウスの徒はこの時また新しいアタナシウスへの非難をもち込んだらしい。それは毎年アレクサンドリアから首都に輸出される小麦についてのアタナシウスの不用意な発言についてであるが (Socrates, H. E. I, 35 ; Athanasius, Apologia, LXXXVII ; Theodoretus, H. E. I, 29) なお執拗に繰返される聖杯破壊問題その他 (Sozomenes, H. E. II, 28) の訴えに大帝は全く堪忍の緒を切つてアタナシウスを西方に追放してしまつた。アタナシウスの説明によれば彼がエジプトの小麦をわがもの顔にしたと言う非難は大帝の心中で全くアタナシウスへの信頼を壊滅させたらしい。大帝としてはアタナシウスを追放しさえすれば直ぐ教会に平和が再現出来ると考えたのであろう。後になつてコンスタンチヌス二世は大帝がアタナシウスを追放したのはその敵と引き離すためであつてアタナシウスを処罰するためではないと述べている (Athanasius, Apologia, LXXXVII)。確かに大帝はエウセビウスの徒にアタナシウスの後任者を出すことを禁じているし、西方にいたコンスタンチヌス二世もアタナシウスを鄭重に迎えて凡ゆる面倒を見ているから (Athanasius, Apologia, LXXXVII ; Hist. arian. ad monachos, XXIX) 此の場合の大帝の処置が行政的なものにとどまつてゐることはよく分る。

ニケア公会議後十年、この様な激しい対立で大帝とアタナシウスの間が終るとは誰が想像し得よう。もはや両者がそれぞれの権威について全く逆の観念をもつてゐることがよく分る。大帝はローマの統治者として社会の安寧秩序を希うのは当然であるが、曾ての皇帝が宗教を統御し指導したと同じ態度でキリスト教にも臨んでゐる。幾多のキリスト教的法令を出し、教会に莫大な寄附をし、公会議を召集し、自ら俗界の司教を称してゐたのもその態度に基いてのことであつた。聖なる教会の信仰をまもるために何ものも恐れない司教の存在も、もしその信仰内容について理解がなければいざらぬ論争を好むものと思われず、時に強情な、また傲慢な、わずらわしいものにし見えなかつたであらう。

しかし為政者としての大帝がたとえ神学を理解しなくとも、理解し得る限りに於ては慎重に行動しようとしてゐる点に注目しておかねばなるまい。例えばエウセビウスの徒にアタナシウスの後任者を扱ばせていたらエジプトは収拾し得ぬ混乱に落ちたことであらう。

アリウスはアレクサンドリアに帰つた (Socrates, H. E. I, 37; Sozomenes, H. E. II, 29)。アリウスは司教座を占領する氣でいたかもしれないが、アレクサンドリアの人々はアタナシウスを慕い、その廢位と追放に憤慨し、激昂してゐた。そこで大帝はアリウスを首都に呼び寄せた (Socrates, H. E. I, 37)。恐らくアレクサンドリアでの復歸工作が至難と見て、先づその実現を首都で試みようとしたのであらう。ところが首都のアレクサンデル司教はこの試みに反対してゐた。大帝は重ねてアリウスに信仰のことをたずね、改めて正統派らしい信仰表明に署名させたと云う。『アリウスは大帝に向い、十年前アレクサンドリア司教アレクサンデルによつて教会から切り離された学説は実は自分の学説ではない、と誓つた。大帝は辞去する彼に、お前の信仰が正統なら誓うのも正しいが、偽りならお前の誓い通り神が裁き給うぞ、と言つた』と伝えられてゐる (Athanasius, De morte Ariti, II)。この会見後、大帝はエウセビウスの徒に

せがまれてアリウスを教会に復帰させる命令を首都の司教に出した様である。エウセビウスの徒もアレクサンデル司教に迫り、もし帝意に屈しなければ廃位し追放すると言ひ、丁度その日が土曜であつたから翌日曜にはもし必要とあれば司教に逆つてもアリウスを教会の中に迎えて聖務をやりとげるつもりだと宣言していた。危地に追い込まれたアレクサンデル司教は『アリウスが聖堂に入らぬうちにわが命をとり去り給え、おんみの教会を憐み給わば何とぞ異端がアリウスと共に教会に立ち入らぬよう、この騒ぎをとり去り給え』と熱心に祈つたと言ふ。その日の夕方、アリウスは多勢の仲間をつれて街を歩いてゐた (Athanasius, *Epist. ad episc. Aegypti et Libyae*, XIX)。彼はコンスタンチヌスのフォールムの近くに來た時に仲間を離れ、内臓の破裂で頓死した (Athanasius, *De morte Ariti*. II-IV; Socrates, H. E. I, 37-38; Sozomenes, H. E. II, 29-30; Theodoretus, H. E. I, 13)。多くのものはこの死を神の罰と見た様で、大帝もアリウスが異端のくせに偽誓した、それでこの様な死により罰せられたものと思つた (Athanasius, *Ep. ad episc. Aegypti et Libyae*, XIX; *Hist. arianorum ad monachos*, LI)。大帝がアリウスの死によつてニケア信仰を確認したと見るものもあるが (Socrates, H. E. I, 38)、まだ受洗してもいない大帝が三位一体の玄義について何を理解していたかは疑問の余地があり、ニケア信仰が教会の聖なる伝統と如何なる結びつきをもつかについては全く無理解であつたと見るべきである。アリウスの頓死は多くのアリウス教徒を改心させたが、或ものはアリウスが敵の呪に倒れたと言ひ、他のものは勝利の喜びがアリウスを殺したのだとも言つた (Athanasius, *De morte Ariti*, IV; Sozomenes, H. E. II, 29)。ともかくアリウス自身が死んでアリウスの復帰工作は水泡に帰したが、アリウス派の立場をこまで強化させたエウセビウスの徒の勢力は牢固たるものになつて居り、殊に大帝とアタナシウスの断裂は既に決定的な姿をとつてしまつてゐるのである。国家と教会の最初の結びつきが早くも深刻な波紋を描いてゐることに留意せねば

なるまい。

アタナシウスが西方に追放されている間、アレクサンドリアの信者はその帰国を待つ公けの祈りを重ね、有名な修士アントニウスも幾度か大帝に歎願の手紙を書いた。ところが大帝はその様な動きに納得させられず、アレクサンドリアの信者に向つて多少気むづかしい返事をして居り、聖職者や童貞が静粛に振舞うべきことを命じ、アタナシウスのことを教会の裁決によつて処罰された馬鹿であるから呼び返すに値しないものときめつけている。アントニウスにも、多数の賢明な司教等が不正な裁決をするわけがない、アタナシウスは傲慢不遜で分裂と混乱をまき起したものだ、と答えている。ともかく大帝はキリスト教を一つの勢力と考え、それを政治力に結びつけ、国家の平和構成に寄与させようとした。つまり統治者としての使命感を過度に意識したことが異端分派に対する判断をアタナシウスのものとは全く別なものに追いやつたのであろう。政治力で教会を統一し、自分の好み通りに動かそうとし、そう言う考え方に逆う一切のものに今度は皇帝としての権力意識から弾圧を試みたのであろう。事実、彼は心底に於ては何でもすることの出来るローマ皇帝であつた。自己の権威に於て王子クリスプスも王妃ファウスタも殺すことの出来た人である。

三三七年復活祭の頃に大帝は病氣となり、健康回復のためドレパナムの湯治場(二二)に行き、そこで求道者として按手された。ついでニコメチアの郊外にあるアンキローナの村に行つて受洗した。(三)たとえその受洗がエウセビウス司教によるものであろうとも、大帝がアリウス派になつたと言ふ様な見方は行き過ぎである。大帝はたまたまエウセビウス司教の管区にいたものであり、そのエウセビウス司教にしてもその司教座を保つからにはニケア信仰の表明に逆うものでなかつた。アタナシウスの追放もアリウスの復帰も大帝が異端的感情をもつていたことを証明するものではない。問題とすべきは受洗の時の信仰表明であるが、エウセビウスの使つた洗礼の信仰表明が何んなものであつたか分らないのである

から、この問題はこれ以上何とも論じ難い。

少くともそれまで大帝は宗教的平和の維持に最も重要な取締りの手段としてニケア信仰をかかっていた。神学論争は殆ど理解しなくともアリウスとその仲間には絶えず正統信仰の表明を求めて居り、それに対する態度は終始かわらず誠実であつた。アタナシウスに厳しい処置をしたが、アタナシウスの正統性を疑つたことは一度もない。それは大帝がアリウス信仰をもつていなかったことを証明するものと見てよいであろう。大帝は死ぬ少し前にアタナシウスを追放から呼び戻す決意をしたと言われている (Sozomenes, H. E. III, 2)。エウセビウスが反対しようとするのを押切つてその命令を出したとも伝えられている (Theodoretus, H. E. I, 30)。コンスタンチヌス二世は大帝がアタナシウスの呼び戻しを決意したものの死亡したため、自分が後継者として父の最後の意思に従つたと言つ (Athanasius, Apologia, LXXXVII)。大帝は三三七年五月ペンテコステの日に死んだ (Eusebius, Vita Constantini, IV, 64)。アタナシウスも帰国した。

ながい西洋の歴史に於ける教会と国家の絶えざる葛藤は常に何らかの形でこのアリウス復帰の問題を想起させずにおかない。何故ならそれは教会と国家の最初の結びつきと言う意味でキリスト教的なものがそれまでの暗い迫害時代から陽あたりのよい舞台に堂々と登場して来て史料にもわかに豊富になるばかりではない。コンスタンチヌス大帝と言ひ、アタナシウス司教と言ひ聖俗両世界を代表する一流の人物が活躍を見せる。一流の人物が一流の行動をしても見解の相違をがむしやりに結びつけるわけには行かない。葛藤混乱の原因をさぐればその罪は大帝自身にもあるし宗教団体にもある。少くとも教会と国家が結びついてさえいれば成功などと思うことは出来ない。これから後も勅令で信仰を統一し

ようとして失敗する姿はツェノーン、ユスチニアヌスで絶えるものではない。キリスト教帝国の繁栄の中にあつて、小アジアの辺境にのたれ死をさせられたヨハネス・クリソストムスの姿ほど我々が政教一致を云々する時に銘記せねばならぬものはあるまい。教義論争の微妙な論理が歴史を紛糾させていると思つてはならない。教理は教会の聖なる伝統を守るためのもので、自己の神学の論理をかけることではない。アタナシウスの三位一体論が全く前者の線を一步も出ようとしないうちに、アリウスの思考が聖書批判に出發するところに最初の分岐点が生れるのであろう。為政者は統治の観点から追放されたものを帰国させることは出来る。しかし信仰内容を問い糾したり改めさせたりするのは行き過ぎで、まして教会に復歸させたり復職させたりを法令でしようとすれば徒らな混乱をかもし出すのみであることを早くもこのアリウスの復歸工作は暗示していないだろうか。

註

- (一) 最も古典的なものは T. Keim, *Der Übert. ritt Constantins des Grossen zum Christenthum* (1862); T. Zahn, *Constantin der Grosse und die Kirche* (1876); F. J. Dölger, *Constantin der Grosse und seine Zeit* (1913); E. Schwartz, *Kaiser Konstantin und die christliche Kirche* (1913); J. Maurice, *Numismatique constantinienne*, 1906-1912; id., *Constantin le Grand* (1927) が最も、更に最近のものとして N. H. Baynes, *Constantine the Great and the Christian*
- (二) ドナトウス派の活動は三二三年から大帝を悩ませ、大帝は初めのうちこれを司教等に委ねていたが、三二六年には親裁している。ドナトウス派の反抗は政府の弾圧を導いているが、リキニウス討伐の直前に政略上か

の弾圧をゆるめ信義の自由をうたつたことが、反してドナウス派の暗躍を永續せしめる原因を作つてつたのだ。ツナトウス派の研究として D. Völter, Der Ursprung des Donatismus (1883); W. J. Sparrow Simpson, St. Augustine and African Church Divisions (1910); P. Monceaux, Histoire littéraire de l'Afrique chrétienne, IV(1912)-VI(1922); W. H. C. Frend, The Donatist Church (1952) などがある。

(三) トニカンズに ついて H. Gwatkin, Studies of Arianism (1890); C. Héféle & H. Leclercq, Histoire des conciles, I, 349-385 (1907); O. Seeck, Untersuchungen zur Geschichte des nicänischen Konzils (1896); P. Batiffol, Sozoméne et Sabinos (1898); P. Snellman, Der Anfang des arianischen Streites (1904); E. Schwartz, Zur Geschichte des Athanasius (1904)-1911); S. Rogala, Die Anfänge des arianischen Streites (1907); G. Bardy, Le symbole de Lucien d'Antioche et les formules du synode in Incarnis (1912); Id., La politique religieuse de Constantin après le concile de Nicée (1928);

Id., Saint Lucien d'Antioche et son école (1932); J. Zeiller, Arianisme et religions orientales dans l'Empire romain (1928); H. G. Opitz, Die Zeitfolge des arianischen Streites von den Anfängen bis 328 (1934); W. Telfer, When did the Arian Controversy begin? (1946); T. E. Pollard, The Origins of Arianism (1958) など幾多の研究が出ている。

(四) アタナシウスについては既に若干の研究が試みられて居る。E. Lauchert (1911) と G. Bardy (1925) の著書は、記述的であつた。J. H. Newman の著書と J. A. Mohler, Athanasius der Grosse und die Kirche seiner Zeit (1844); L. Atzberger, Der Logoslehre des hl. Athanasius (1880); A. Stülcken, Athanasiana (1899) などは、全書として H. Lietzmann, Chronologie der ersten und zweiten Verbannung des Athanasius (1901); N. W. Sharpe, Athanasius the Copt and his Times (1915); N. H. Baynes, Athanasiana (1925); K. F. Hagel, Kirchl und Kaiserthum in Lehre und Leben des Athanasius (1933); O. Seel, Die Verbannung des Athana-

sius durch Julian (1939); K. M. Setton, Christian attitude towards the Emperor in the Fourth Century (1941); W. Schneemelcher, Athanasius von Alexandrien als Theologe und als Kirchenpolitiker (1950-1951); P. Peeters, Comment St. Athanase s'enfuit de Tyr en 335? (1951) など多説がある。

- (五) この両名は初め hooousios の語をあやかり、署名を拒んだ五名の司教の中にいたものであるが、結局は署名しただけで、ところがアリウスの流刑に反対し、その仲間を支援したかどで廢位され追放された (Gelasius Cyzicus, H. E. III. ap. I; Theodoretus H. E. I, 19-20; Sozomenes H. E. I, 21)。Philostorgius (H. E. I, 10, II, 1) によるとエウセビウスは公會議の三ヶ月後にガリアに追放されたらしい。なおこのエウセビウスは Ammianus Marcellinus XXII, 9 によると背教者ユリアーヌスの遠縁に当るらしいが詳細なことは全く分らない。
- (六) Socrates や Sozomenes の史料の操作次第で、アリウスが先づ復帰し、それに刺戟された二名の司教が盛んな歎願運動をしたことにもなるが、こう言う見方は一般に拒けられている。

アリウス復帰運動の史的考察

(七) この訴状の宛名は不明であるが、文脈から見て教会關係入りのものであることが分る (J. Stevenson, A New Eusebius 1960, p. 377)

(八) H. M. Gwatkin, Studies of arrianism, London, 1900, p. 138, n. 3

(九) この招請状の日付は十一月二十七日で、年代は三三〇年らしいが、よく分らない。(X. Le Bachelet, Arrianism—D. T. C. col. 1800)。

(一〇) 何故、正統派がそれほど強くこのことを主張するかと言えば、これが教会の信仰を最も鮮明に表現するものであったからで、この点がぼやければ三位一体は宗教の本質を失つて単なる幾何学的形式論か、哲学的な理論になるだけであつて、現に三位一体を云々しながら異端に墮つたものも爾後、決して少くはない。

(一一) この詳細を述べるのは Socrates, H. E. I, 25-26 で Sozomenes, H. E. II, 27 はもつと簡単である。

(一二) 「希望するものを教会に自由に迎え入れてほしいと云うのが私の考えと心得てもらいたい。誰かの入るのを拒んだ事実が分れば位を剃いで町から驅逐するつもりである」と。大帝は pontifex maximus としての常識から自分の命令をきかない不逞な司教の存在などは許せなかつたのであろう。その思想は全く異教的で

ある。大帝がアリウスを復帰させる命令を出したことはアタナシウスの証言からも疑の余地がない。

- (一三) Rufinus (H. E. I, II) も Sozomenes (H. E. II, 27) も大帝が事件のそもそもの始めからイエルサレムでの裁決に依存していたと誤認しているが、それは全く時代錯誤で、彼等はアリウスが三三五年になつてようやく追放からもどつたものと思ひ込んでいるのである。

- (一四) この書簡は Athanasius, Apologia LXIV 及 LX を参照。

- (一五) Hefele は少くともエウセビウスが仲間の統合に苦心したのであることを推定し、エウセビウスの直属の部下である Lucianists, 史家エウセビウスの指導する聖子従屬説的な origenistes, ヨハネス・アルカプ司教に率いられるメレチウス派が homoousios に対する共通の敵対意識に結びつけられて行く過程をそこに見ようとしている。しかしその何れもが、どれだけ真面目にその問題に対決していたかについては大いに疑問の余地を残して居り、「当事者の中には明かに *ousia* (本質) とか *hupostasis* (実体) と言つもの *in per-sona* (位格) との区別が引かれないものも存在していた様である。従つて *ousia* とか *hupostasis* の一致

- を云々するのは位格の存在や区別を危うからしめるものと思われた。それだけに感情のこじれに加えて、曖昧な事柄にむきになることによつてエウセビウスの徒は増大したのだと云う風に説明している (Hefele-Leclercq, Histoire des conciles, I, p. 653, n. 5)。
- (一六) Eusebius, Vita Constantini, IV, 40-42. チルの會議宛の大帝の書簡は op. cit. IV, 42 や Mansi, Concilia, II, col. 1139ff. にある。この會議はエジプト司教を除いて約六〇名の司教を集めていた (Socrates, H. E. I, 28)。これにアタナシウス派のエジプト司教四八名が加ると約一〇名となる。前述の Gwatkin (op. cit. p. 89) はこの数を少なすぎると見る。最初からエウセビウスの徒が優勢で、列席していた穩健派の人々は事態のなり行きに全く無力であつたことが分る (Athanasius, Apologia, LXXX; Sozomenes, H. E. II, 33; Rufinus, H. E. I, 16)。
- (一七) イスキラスの聖杯をこわしたかどで司祭マカリウスはチルに縛られたまま、つれて行かれた (Athanasius, Apologia, LXXI)。曾てイスキラスがアタナシウスに赦罪したのは事実であるが、教会には入れてもらえなかつたので (op. cit. LXXIV)、イスキラスは復讐心に燃えて敵方に走ることになり、敵はそうさせる

ためにイスキラスに司教座を約束していたらしい (op. cit. LXXXV)。イスキラスはイスキリオンとも呼ばれている (Sozomenes, H. E. II, 25)。アタナシウスに対する不評は種々な形で伝えられたらしくアレクサンドリアからの或る手紙は「エジプトで誰も教会に集ろうとしなくなつたら、それは全くアタナシウスの責任だ」とも記していた (op. cit. II, 25)。

(一八) まことしやかな解釈とは敗北をごまかすための新しい嘘で、アタナシウスがアルセニウスを柱に縛り包んでからさんざん打ちたたき、それからアルセニウスの家に火をかけた、アルセニウスは窓からとび出て助かった、その脱走は秘密にされ、爾後、生きてゐるしるしも見せなかつた、それで当然アタナシウスがアルセニウスを焼殺したと云うことになつた、と主張するものである。

(一九) Rufinus (H. E. I, 17) & Theodoretus (H. E. I, 28)によつて、この事件の前にもう一つ別の訴えがある。一人の女が会議に引出され、自分が夜中にアタナシウスの訪問を受け、乱暴されたと訴えた。それに答えるために呼ばれたアタナシウスは友人のチモテオ司祭と同行した。チモテオ司祭がその女にアタナシウスと間違われたことによつてこの嘘は暴露した。こ

の話をひろめたと思われる人は Rufinus で Theodoretus や Sozomenes (H. E. II, 25) は Rufinus からその話をうけついでらしく、Sozomenes もこの話をした後で「会議の決議はこのことを何も言っていない」とつけ加えている。ところでアリウス派の Philostorgius (H. E. II, II) もこの Rufinus の話によく似た話をしてゐるが、それによるとアタナシウスがその様な女の非難をカエサレア司教エウセビウスにしたが、その女がエウセビウスを知らなかつたので失敗に帰した、と云うわけである。Rufinus も Philostorgius もつくり話を聞き込んで記したのかもしれない。

(二〇) この手紙はアタナシウスが三五八年に Serapion 宛に記したもので、事件当時コンスタンチノポリスにいた司祭 Macarius の話にもとづいて書いたものである。アリウスの死についてはこれより前の三五六年に記した Ep. ad episc. Aegypti et Libyae, XIX で言及している。アリウスの死は三三六年のことであるから、事件と記録の間には二十年のへだたりがある。

(二一) Drepanum は大帝の母クレナ (c. 247-327) の生地であるため Helenopolis と呼ばれていた。

(二二) 大帝はヨルダン河で受洗する希望があり、そのために受洗の時機がおくれたと言ふ(Eusebius, *Vita Constantini*, IV, 57)。Hieronymus は *Chronica* の中でエウセビウス(ニコメデア司教)が洗礼をさすけたと述べているが、この人の管区にいたとすれば此人から受洗するのは順当である。しかしそれを理由に大帝がアリウス派になつたと云う Hieronymus の解釈は思いすぎであらう。